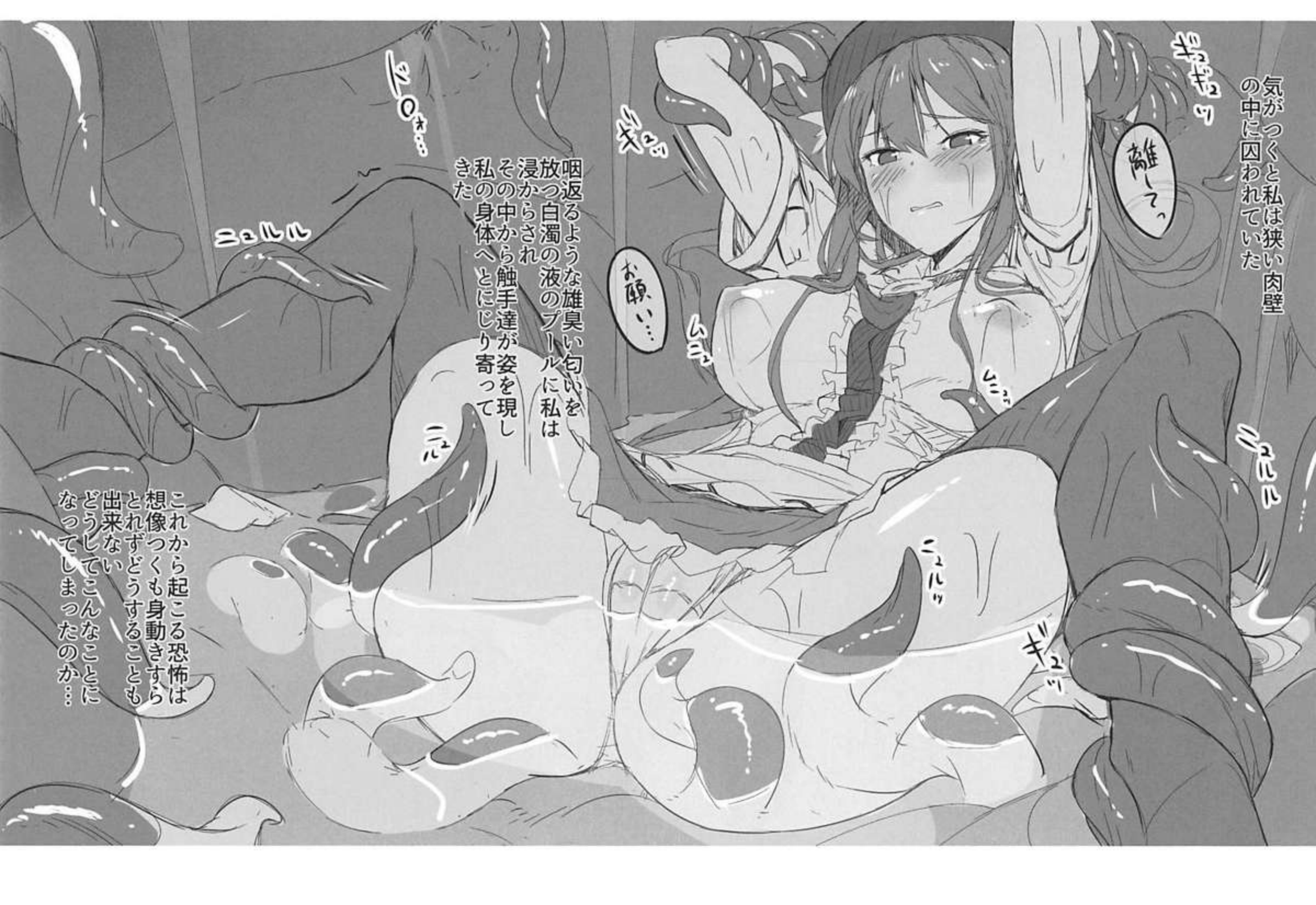
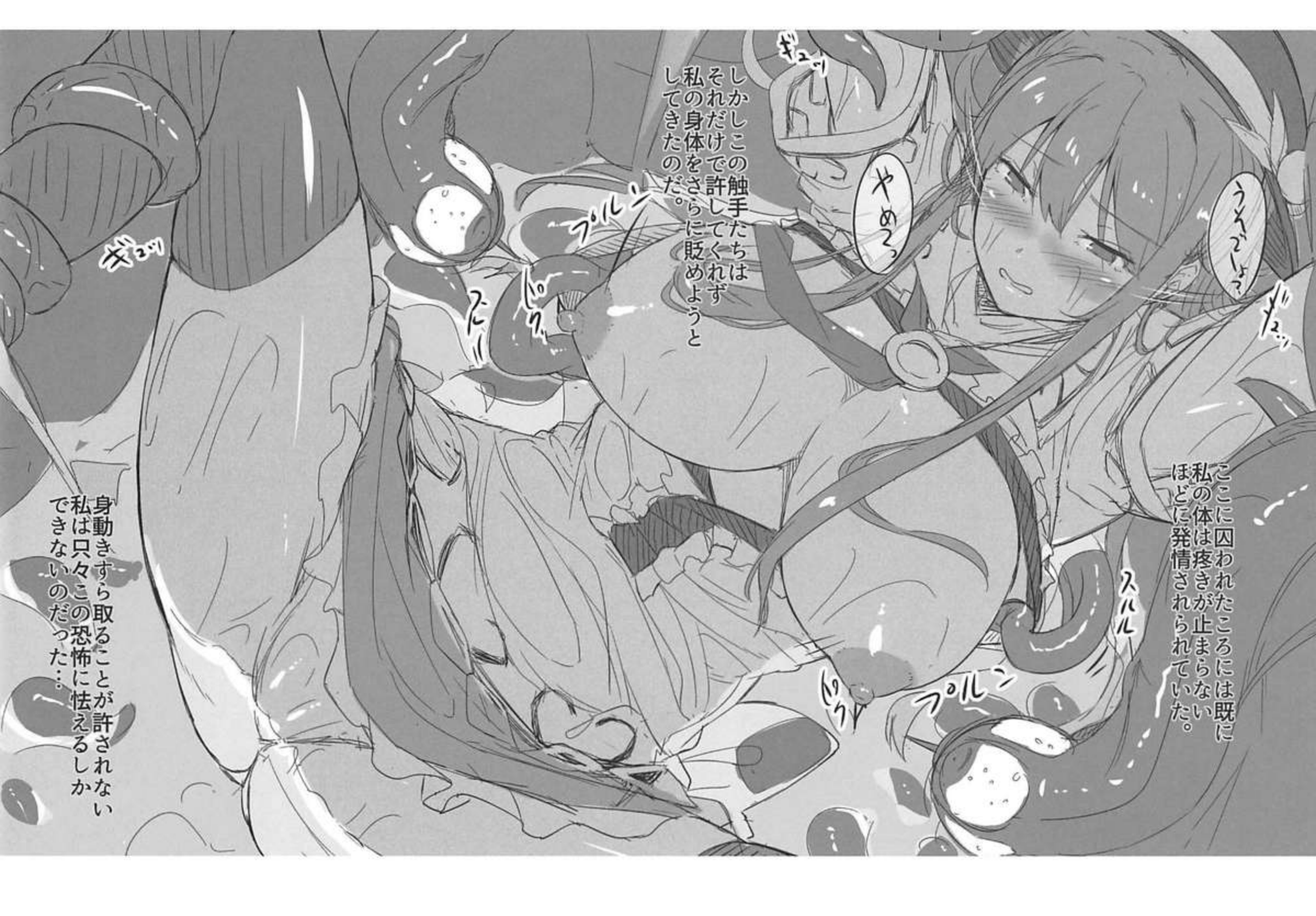
天触
石
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止


気がつくと私は狭い肉壁の中に囚われていた
ギュッ
離して
ギュッ
ムニュ
ムニュ
お願い…
ニュルル
ニュルル
ニュルッ
ギュッ
ドロォ…
ニュルル
咽返るような雄臭い匂いを放つ白濁の液のプールに私は浸からされ
その中から触手達が姿を現し
私の身体へとにじり寄ってきた
これから起こる恐怖は想像つくも身動きすらとれずどうすることも出来ないどうしてこんなことになってしまったのか…

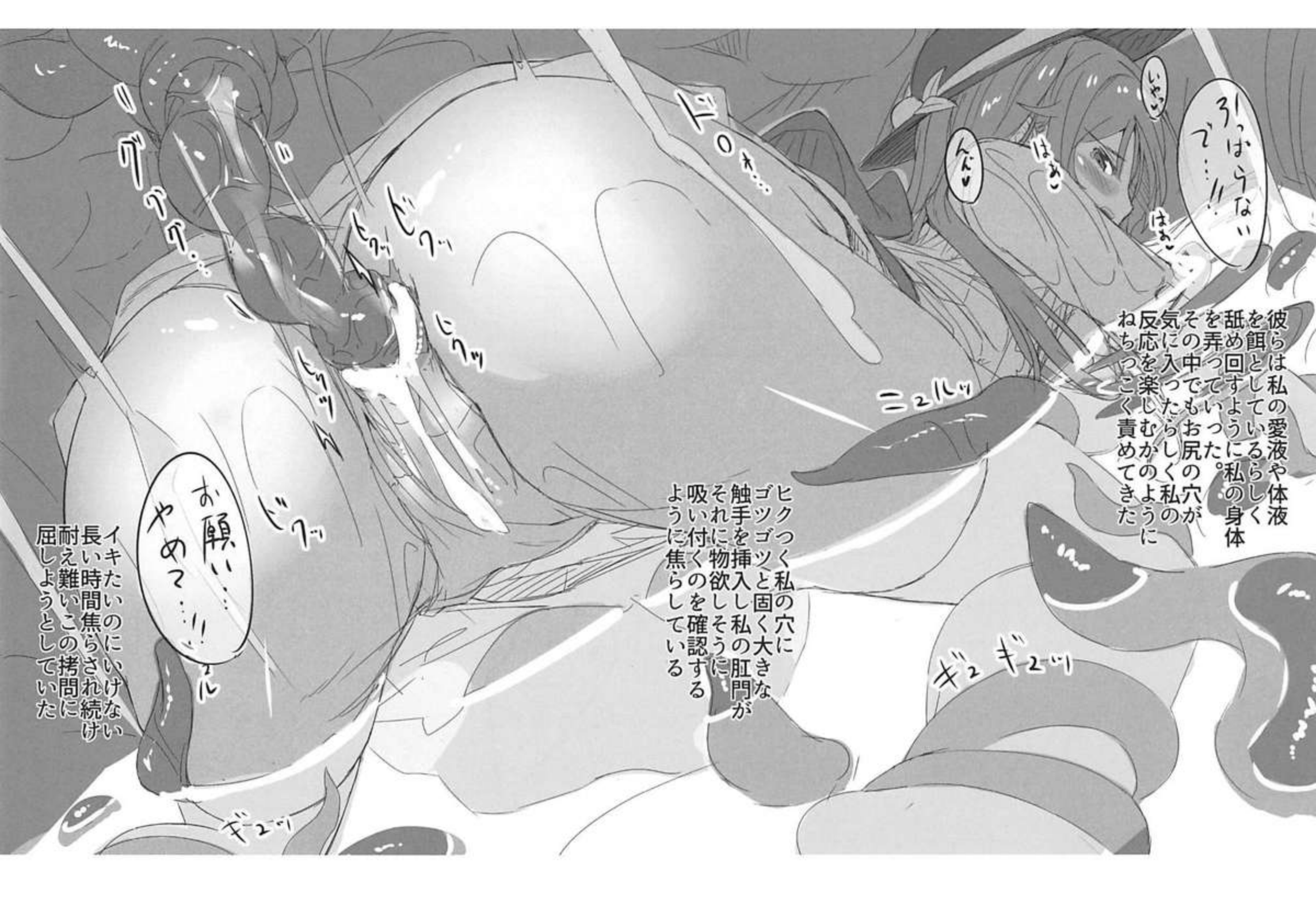
覚えているのは魔物に呑み込まれたということ
抵抗しようにも四肢の自由を奪われ為す術なく呑まれてしまった
このまま呑み込まれて消化されてしまうのか…
そんな恐怖が膨らんでいった
きもちわるい…
食べないで…
ぐちゅっ
ぎゅっ
ぎゅー
ぎゅ
ぐちゅ
ぐちゅっ
ぐちゅ
ぐちゅ
むにゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぎゅ
ぎゅー
ぎゅ
ぎゅ
とろぉ…
こぅルル

蠢く肉壁の中を奥へとへ進んでそこは瘴気が吹き出していたが
酸欠ぎみのこの状態では呼吸を止めることが出来ず一方的に瘴気を当てられ続けてしまった
不思議なことにこの瘴気は催淫作用を持っているようで私の身体は火照っていったのだ
ぐちゅっ
ぷしゅーっ
ぐちゅ
ぷしゅーっ
ぐちゅ
ぷしゅーっ
ぐちゅ
はぁはぁ
はぁはぁ
ぷしゅーっ
ぷしゅーっ
ぐちゅ
むにゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
むにゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐち

時間が経つにつれ
瘴気の濃度が上がっていき
まとわりつくように
私を包み込んできた
次第に肉壁からの圧迫
が増すも
摩擦による快楽で
私は果ててしまったのだ
ぐちゅっ
ぷ
ニューッ
ぐちゅ
ギチ
ぐちゅ
ギチ
ビクッ
ビクッ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ニューッ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

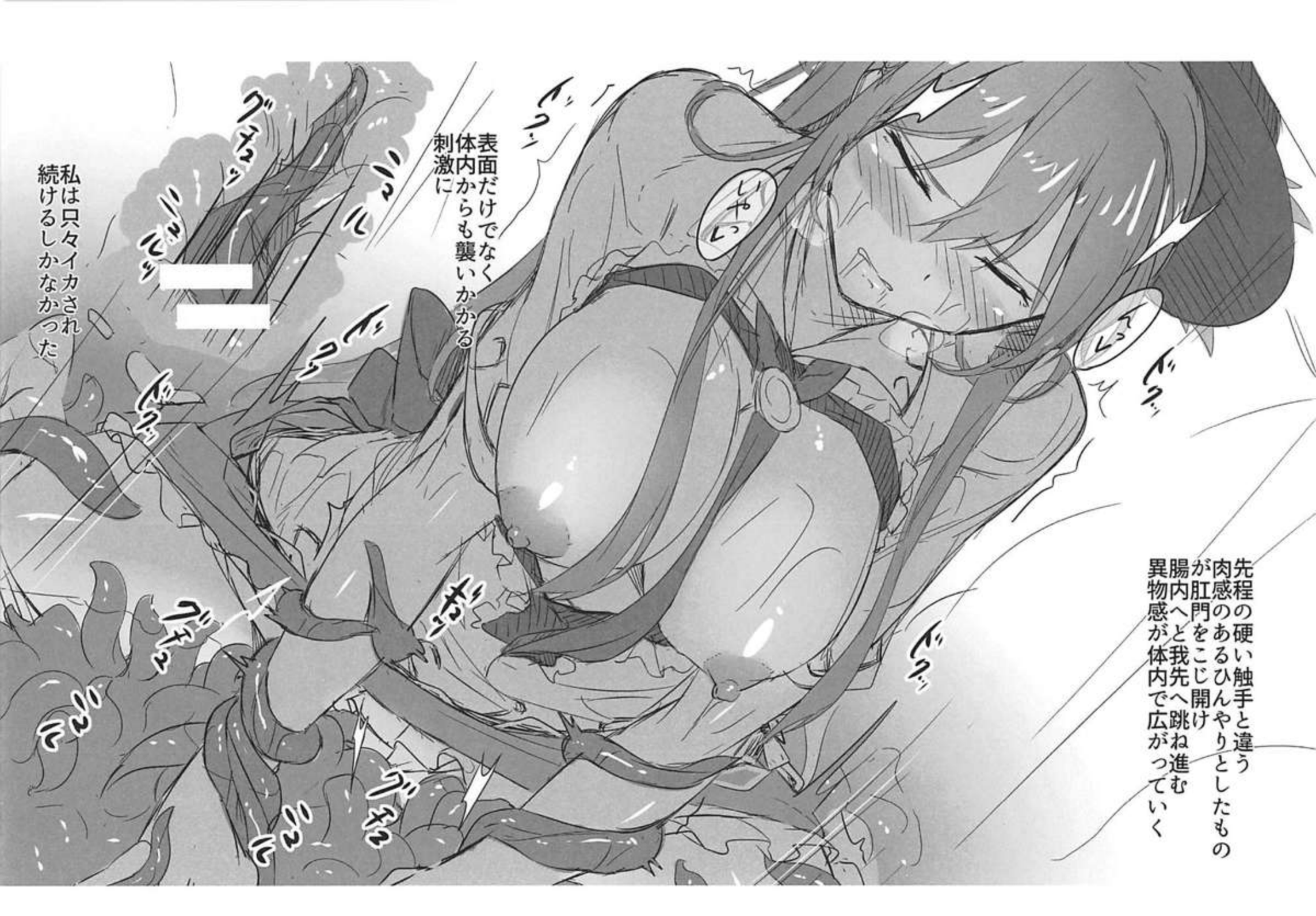

ここに囚われたころには既に私の体は疼きが止まらないほどに発情されられていた。
うそでしょ?
やめてっ
しかしこの触手たちはそれだけで許してくれず私の身体をさらに貶めようとしてきたのだ。
身動きすら取ることが許されない私は只々この恐怖に怯えるしかできないのだった…

彼らが投与する液体にも強烈な催淫効果があり何度も与えられる度に刺激が次第に快楽へ変わっていった
それと一緒に母乳が出る肉体へと改造されてしまい乳管をから射乳される快感に溺れている私を知ってか絞るように私の乳首を執拗に責め続けた
最早私の全身は性感帯のようになり軽く撫でられただけで何度もイッてしまう程になってしまっていた
だめぇ
んんっ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


引っぱらないで…!!
いや…
はぁ
んぐ♥
はぁ
彼らは私の愛液や体液を餌としているらしく舐め回すように私の身体を弄っていった。その中でもお尻の穴が気に入ったらしく私の反応を楽しむかのようにねちっこく責めてきた
ドクッ
ヒクッ
ヒクッ
ヒ

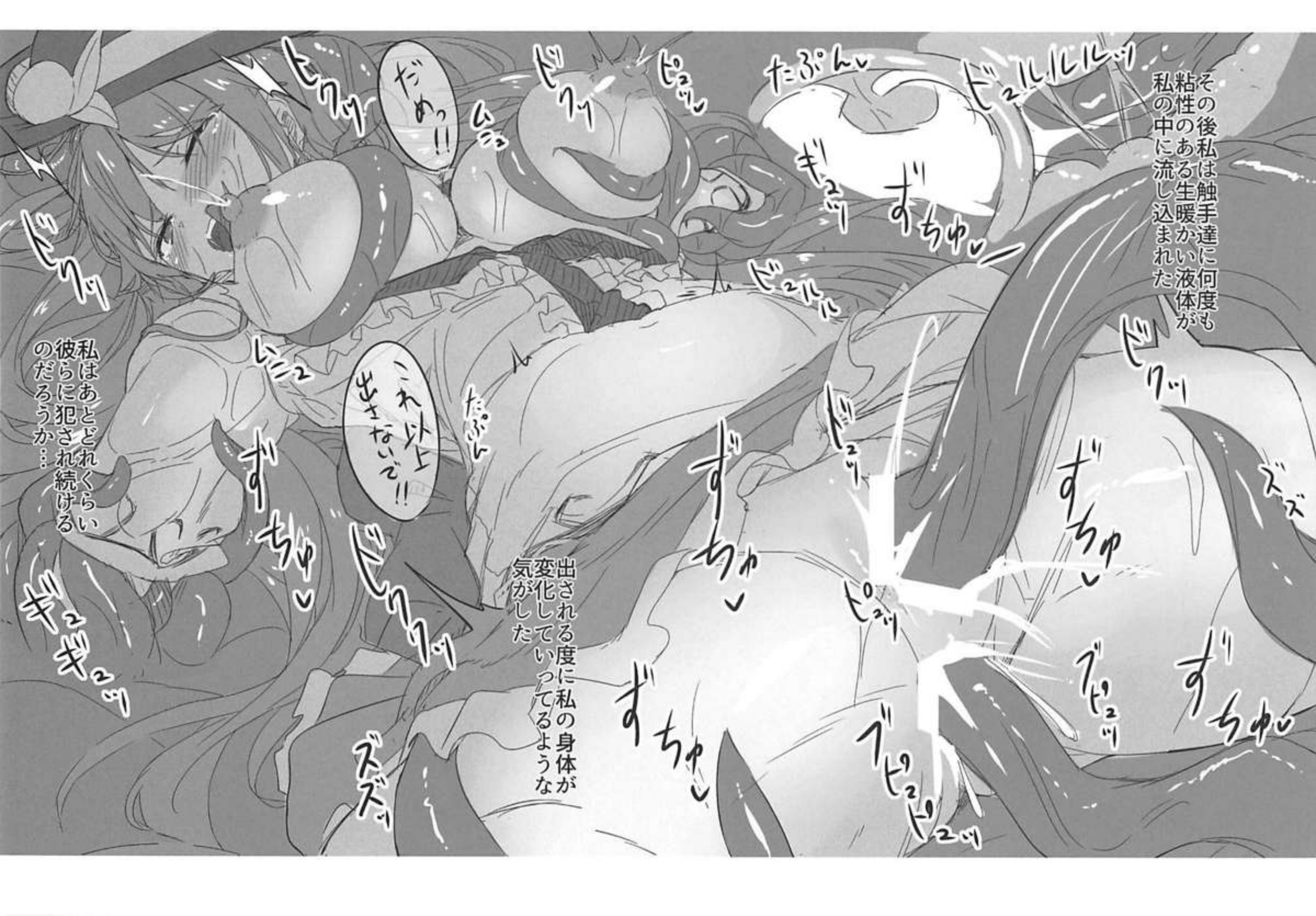
触手が勢い良く肛門から引き抜かれると同時に私はその暴力的な快感に耐えられず激しく身を震わした
私が呼吸を整えようとするもその間もなく再びその硬い球体が私の肛門に入って来て
意識を失おうとも何度も私の中を貫いていった
ビクッ
はぁ
はぁ
はぁ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

次に目が覚めると一面
ウネウネと動く小さな触
手達にの上に跨がされていた
股下にひんやりとぬめった
触手たちが
私からの分泌液を求め
蠢き続けた
やめ？
だめ？
ハンッ
両の手は縛られた私は
この快楽から逃げる術を
持っておらず
理性が崩壊するのを口々
待つしかなかった
ここでも彼らは私の
尻穴へと興味を持ち
こじ開け中へと侵入
してきた
ニュプッ
ニュル
ニュルッ
ニュル
ニュルッ
ニュル
ニュルッ
ニュル
グチュ
グチュ


先程の硬い触手と違う肉感のあるひんやりとしたものが肛門をこじ開け腸内へと我先へ跳ね進む異物感が体内で広がっていく
いやっ
表面だけでなく体内からも襲いかかる刺激に
私は只々イカされ続けるしかなかった

疲労から倒れ込むもどこにも逃げ場がなくむしろ状況が悪化してしまった
トプチチ
トプチッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ニュルル
おしりおかしくなっちゃう♡
後ろだけでなく今度は胸の方にも群がり母乳を求め始めた
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡
ちくびもだめぇ♡
ギチッ
ムニュ
ムニュ
ドクッ
ムニュ
ムニュ
ギュッ
全身を快感がめぐり私はその心地よくも暴力的な快楽へ身を捩らせ求め出していたのだ

しかし耐えられず逃れようとする私を彼らが許してくれるはずがなかった
四つん這いの体制で自由だけでなく私の純潔をも奪っていった
化物からの辱めを受けていることすら考えられないほどの快楽物質が脳内を駆け巡る
本来ならば迎えるであろう激痛も今の私の身体には快感でしかなかった
ぱちゅ
ずちゅ
ぐちゅ
ずちゅ
ぱちゅ
ずちゅ
ぶるん
ぶるん
んあっ
だめっ


その後私は触手達に何度も粘性のある生暖かい液体が私の中に流し込まれた
だめっ!!
これ以上出さないで!!
出される度に私の身体が変化していってるような気がした
私はあとどれくらい彼らに犯され続けるのだろうか…

ドドドドドド
彼らは私の身体を貪り満足し終えると去っていく…そんな日々が続いていたがある日とても大きな触手が私の前に現れた
その大きさはひと目見ただけで異質なものだと伝わり
そんな大きなの
ヒクッ
ヒクッ
ヒクッ
ブル
ブル
ブル
ニュル
ニュル
ニュル
ギュッ
ギュッ
ギュッ
入らないよ…
麻痺していた私の恐怖心を思い出させたのであった

その太い触手は私の穴に入り卵を産み付けてきた獲物としてだけでなく苗床としても私の身体を利用出来るよう肉体の改造をされてしまったのだろう
どんどん入って…
卵を産み付けられる度にお尻の穴が押し広げられ
あっ
もう…
痛みと快感が同時に襲いかかると共にお腹が圧迫感に支配されていった

産み付けられた卵達は羽化の時期を迎えたのか自分達で出口の方へと向かっていった
穴から出てくる度に強い快感が身体を貫きその度に絶頂を迎えさせられた
私はここから逃れることが出来ずいずれ生まれてくるこの触手達にも犯されてしまうのだろうか…
(END)
ビクッ
プリュッ
ビクッ
プリュッ
ビクッ
プリュッ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ニュル
ニュル
ニュル

■あとがき
どうもです。neropasoです。
あとがき用のページがなかったので裏表紙から失礼します。
やぱり天子ちゃんに触手を巻いたのを描くのは楽しいです。
そのうち今回の本のイラスト使って本当のCG集とか作ってみたいです。
短いですがそれでは…！！

■奥付
編集・企画： neropaso
誌名：天触・呑
著者： neropaso
印刷： サングループ様
発行日： 2019/05/05
第十六回博麗神社例大祭
連絡先： neropaso@gmail.com

※無断で本誌の内容を転載、転写、複製、デジタル化
することを禁じます。